

続・奇跡はある

徳永 耕一

(12)

題字・林田八郎

不動産競売

二〇二一年十二月、四十周年記念式典が終わってひと息ついた頃、ふと不動産競売情報に目を通すと、小浜温泉の「雲仙荘」という文字が目についた。その物件は、数力月前、ある業者さんから購入を勧められたが、融資がおもわしくなくて断念した物件だった。

その後、当社の「浜観ホテル」の建替えの件も出てきたので、その代替にも考えて、競売に参加することとした。

ところで、不動産競売といえば、以前こんなことがあった。不動産を始めて間もない一九八三年頃、「不動産業をするなら、せめて広い土地を持つておこう」と思い立って、競売情報を調べているうちに、小長井町の広い山林が目についた。

数日前から価格を考えて、「よしこれでいこう」と決めて、事前に入札書に書き込んで入札に臨んだ。ところが、会場には執行官と事務員以外には誰もいない。

そこで欲が出て、「だれもないのに高い値段で入れる必要はない」と思い、新しい入札書をもらって、最低価格に書き直して入札した。

中庭で締め切りを待っていると、ドカドカと靴音高くふたりづれがやってきた。「入札物件が重なっていないければよいが。



雲仙市小浜温泉雲仙荘



ジスコ不動産株式会社
ジスコホテル株式会社
ジスコ子ども支援株式会社

長崎県諫早市永昌町4-26

| TEL | 0957-27-1112 | FAX | 0957-26-1777

しかし、物件は複数あるので、まさか重なることはないだろう」と言い聞かせて、開札を待った。

執行官の「今から開札を始めます」との呼び声で、私たちが入札箱の前に集まると、執行官は箱から入札書を取り出したが、その時、一瞬執行官の手が止まった。やがて読み上げた入札価格は、同額だった。

少しでも端数をつけておけば全く同じ数字ということはないはずだが、二人とも敵がいらないと思ったので、端数をつけなかったのだ。

同額だった場合は、再入札になる。今度は敵が目前にいるので真剣だ。「勝たなければ」と強く意識しながら、金額を短時間のうちに考えて再入札した。

二回目の開札の時、入札書を見ながら執行官の表情が目に見えて曇っていった。なんと、または金額が同じだったのだ。執行官は焦りながら柵の上から分厚い書類を取り出して、調べ始めた。やがて吹っ切れたように言葉を発した。「それは、ジャンケンをしてください」「えっ」と思ったが、執行官は真顔で続けた。「あみだくじで決めますが、それをどちらが先に引くかをジャンケンで決めてもらいます」

厳粛な裁判所の中で「ジャンケンポン」の声が響いた。

こぶしに力を入れたジャンケンだったが、私は負けた。その時に思った。「欲を出したり、フレたりしてはよくないな」

雲仙荘は、「これで負けたら仕方がない」という納得の行く価格を考えて入札した結果、無事落札できた。

今後は、このホテルの再建が大きな課題だ。

〈次回10月31日掲載予定〉